

学校紹介



岩手県立高田高等学校

－目指す学校像－

- (1) 校訓「至誠」「錬磨」「創造」に則り、社会や地域に寄与できる人材を育成する学校
- (2) 生徒・保護者が望む進路を達成できる学校
- (3) 学習、部活動、学校行事が充実し、能力を発揮、伸長できる学校
- (4) 震災からの復興

1. 沿革

- 昭和 5. 4.19 高田町ほか八ヶ町村学校組合立高田実科高等女学校として設立される
5. 5. 6 開校（高田尋常小学校に併置）
23. 4. 1 学制改革により、岩手県立高田高等学校と改称
- 平成 20. 4. 1 高田高校（普通科）と広田水産高校（水産科）が統合し普通科、水産科併設校となる
- 22.10.16 創立 80 周年記念式典挙行
23. 4.28 東日本大震災による被災のため大船渡東高校萱中学校舎に移転



高田高校仮校舎
(大船渡東高校萱中学校舎)

2. 教育目標

本校の教育は、教育基本法、学校教育法に基づき、民主的で文化的な国家を建設し、世界平和と人類の福祉に貢献する人間の育成を期することを目的とする。

3. 本校の特色

本校は各学年、普通科 4 クラス、海洋システム科 1 クラスの学校です。1 年では各教科を共通履修とし、基礎学力を身につけるよう努めています。2 年からは普通科は文系、理系に、海洋システム科は食品コースと海洋コースに分かれ、さらに 3 年では普通科文系を国公立文系とその他のコースに分けるとともに、修得単位数を 28 単位に設定し、本校生徒の多様な進路希望に対応できるように配慮して教育課程を編成し、時間割を作成しています。

また、進学希望者が多く進学指導に力点を置いているものの部活動も奨励し、本校教育の基幹をなす一つとして、授業時数の確保とともに部活動を通じた教育活動にも力を注いでいます。

4. 本校の数学教育

[普通科]

1 年生は数学Ⅰ・数学 A・数学Ⅱを履修することとしています。数学Ⅱが 1 単位ではありますが、先取りしています。この度の指導要領の改訂に伴って、数学Ⅱの履修を先取りせず、2 年生から履修することを検討しています。

2 年生は数学Ⅱ・数学 B を履修することとしています。単位数の違いはありますが、履修科目は文系、理系とも同じです。

3 年生の文系は進路対策の授業となり、理系は進路に応じ数学Ⅲ・数学 C の授業クラスと進路対策授業クラスとに分かれます。

各学年の担当者が生徒の状況を見て習熟度別授業の体制をつくることもあります。後で述べるように教室数の関係で、2クラスを3クラスに分けるような分割は困難な状況です。

[海洋システム科]

1年生で数学Ⅰ、2・3年生で数学Aを分割履修します。授業はTTで行っています。海洋システム科の授業については『数学教室』（国土社刊）2012年3月号に掲載されましたので、ご覧いただければその様子がわかると思います。

数学科では授業で生徒が学習内容を理解できる「わかる授業」を目標に、工夫ある授業実践に取り組んでいます。そのため、同じ教科内でお互いの授業を見学する、研修会に積極的に参加する、学年を越えて縦断的に授業担当者を配置するなど教員同士もお互いに授業に関して、交流を図ることのできる機会が増えるようにしています。

5. 東日本大震災と本校

校名の「高田」は本校が所在していた陸前高田市に由来します。しかし、現在は隣市の大船渡市に住所を移しています。3階建てだった本校校舎が、大津波によって3階天井付近まで飲み込まれ、校舎が使用できなくなってしまったためです。



被災した本校舎
（手前は体育館だったがつぶされていた）

震災のあった日は、4時間授業で、地震があった時間には部活動が行われていました。校内に残っていた全生徒・職員は、校舎裏の高台にある第2グラウンドへ避難しました。グラウンドから見た津波は陸前高田市の街をいとも簡単に飲み込んでいきました。自分の家があったであろう場所が津波に飲み込まれるのを目の当たりにした生徒たちでしたが、薪拾いや布団の運搬といった夜を迎えるための準備に率先してあたりました。本来であれば、家族の安否や自宅の心配など、心をよぎることがたくさんあったと思われますが、どの生徒も冷静な行動をとったことは、避難してきた地域住民の支えになったものと思います。着の身着のままで避難した生徒がほとんどで、小雪もちらつく3月の夜の寒さは、厳しいものだったに違いありません。

3月下旬になって、高校再編により使用されていなかった大船渡東高校萱中校舎を仮校舎として学校を再開することが発表されました。以前に萱中校舎を使用していた学校のクラス数より高田高校のクラス数の方が多く、萱中校舎で教室数を確保するために1つの教室を2つに間仕切りするなどの改修がなされました。このようにして、教室数を補っているため、教室に余裕はなく、クラスを細分・統合しての授業や課外活動など、従来行ってきたやり方を制約せざるを得ない状況となっています。

学校を再開できたのは平成23年5月のことで、1か月遅れの始業となりました。始業したとはいえ、避難所生活の生徒も多く、学校から帰宅後に学習するには十分な環境とはいえませんでした。周囲の人に気を遣って、布団をかぶり、懐中電灯をつけて課題に取り組んだという生徒もいました。このような状況にあったため、それまで以上に「授業」の質が問われていると感じました。授業の中で生徒に学習させ、授業の中で学習内容をしっかりと理解させることが求められました。当たり前のことではありますが、その当たり前のことをきちんとできているのかどうかを、非常に

意識することとなりました。授業で教え、課題を与えて勉強させる、そのような形になりやすい中、自分の授業について改めて見つめ直す機会となりました。



平成 23 年度入学式 (H23. 5.10)
於：大船渡東高校第一体育館

萱中校舎に移るにあたり、スクールバスの運行が開始され、多くの生徒がスクールバスで登校することとなりました。そのため、学校生活にバス時間という制約も生じました。これにより朝や放課後の時間利用は難しくなったものの、バス時間に合わせて行動しなければ、登下校がままなりません。これまで以上に計画的に生活する、時間をどう作り出すかを考えて、工夫を凝らした生徒が多数いました。これは時間の使い方について生徒自身が見直すきっかけにもなったようです。

学校再開後、震災による心的な負担を知り、生徒に寄り添えるようにと全生徒を対象に面談を行いました。その時の生徒の反応は様々でした。「自分の家は無事だったから心配要らない」という生徒。「学校が始業したことが本当にうれしい」という生徒。その一方で、普段の学校生活では、見せることの無かった面を見せる生徒もいました。肉親を失った悲しみに触れたとき、私たち教職員には生徒にかけられる言葉もなく、ただ、一緒に涙を流すことしかできなかったのです。

仮設住宅の建設が進むにつれ生徒たちは避難所から仮設住宅へと居住場所を変えていきました。全ての生徒が仮設住宅へ落ち着くことができたのは夏休み中のことだったと記憶しています。始業

以来、避難所で生活している生徒に配給されていた昼食の弁当もその数を少しずつ減らしていきました。

現在、あの震災から1年半が過ぎました。その間、とても多くの団体・個人から本校に対して日本国内はもとより、海外からも多くの支援をいただきました。ネット上に載せられた報道記事を見て、高田高校の現状を知り支援を申し出ていただいた方もおりました。多くの皆様に、この場を借りて、御礼を申し上げます。生徒たちはたくさんの方々の物心両面の援助をいただいて、学校生活を送っています。震災で多くのものを失いましたが、たくさんの方々との絆を得ることができました。学習や部活動など学校生活を立派に送ることが、支援に対する感謝の気持ちを表すことになると考えて、職員・生徒ともども一日一日を大切に過ごしています。生徒を海外に派遣する事業や国内外の学生と交流する事業など、生徒たちの世界も大きく広がりました。生徒たちも地域の復興、世界とのかかわりなど、前向きに自分の将来についても考え、とても大きく成長しています。

時々「何か必要なものはありますか？」と尋ねられることがあります。そのとき、私は「特に必要なものは今はありませんが、ただ、復興までは長い道のりですからこの震災のことを忘れずに前に進んでいきたいと思います。

現在、陸前高田市に高田高校の新校舎を再建するための計画が進んでいます。新校舎の再建は、保護者アンケートでも現在の高田高校に望まれることの第一に挙げられる事柄で、陸前高田市に高田高校が戻るその日を多くの人が待ち望んでいます。今このような状況ではありますが、生徒が高田高校でよかったと思える、そういう学校になるよう職員一同取り組んでいます。

改めて多くの方の支援に感謝いたします。ありがとうございます。(数学科 川村昌広)